

## 書写資料における書誌作成の課題と対応

## 和漢古典籍研究分科会

立正大学図書館 松尾 蘭  
 日本体育大学図書館 山中 浩子  
 中央大学図書館  
 立正大学図書館 小此木 敏明

## 1. はじめに

和漢古典籍資料には、テキストが印刷された「版本」のほかに、手書きの「写本」が存在する。写本にはタイトル・著者・書写年等の情報が書かれていないことも多く、書誌の作成自体が難しい。そのため本稿では、「書写資料における書誌作成の課題と対応」というテーマを設け、未経験者でも写本の書誌を作成できるよう、注意点や調査方法の実例を示すことにする。

なお、日本目録規則 (NCR1987R3) の 3.0 通則によると、「書写資料」は写本・手稿だけでなく、その複製物も対象とする他、洋書にも適応できるとするが、今回は書誌作成業務にて扱うことが多い江戸時代の写本に限定して調査を行った。また、調査対象の資料には会員校の所蔵本を用いた。

## 2. 書写資料とは

海野圭介「写本について—奥書・識語を中心に—」を参考に述べる。

はじめに、書写資料の歴史について触れる。現存する日本最古の写本は、615年、聖徳太子著、自筆稿本と伝える「法華義疏」とされ、7世紀以後、多くの写経が行われた。10世紀に入ると「かな」が確立し、連綿体を発展させ、日本独自の写本の様式を生み出し、近世に入ると商業出版が広く行われるようになるが、写本も根強く制作・享受された。日本で写本が重視された理由として、まとめると次のようになる。

- ①写本を版本より上位に見る
- ②有名人、公家・書家等の筆蹟を尊重する
- ③軍記物・実録・地方史等写本でないと流通できない
- ④講義録、芸道の秘伝書等一般への流布を嫌う
- ⑤自分自身で書物の制作を行う

現在に残る写本の多くは江戸時代に作成されたものだが、写本が書物の中で重要な位置を占めるのは明治期をもって終わる。

次に、書写資料の種類を見る。写本には著者が自ら書いた「自筆本」、それを転写した「転写本」があり、転写には次の方法がある。

- ・透写：薄様あるいは薄手の楮紙を親本の上に置き、筆でなぞり書きしたもので、忠実に再現される。
- ・謄写：紙面の忠実な再現は意図せず、テキストを転写すること。親本を横に置いて書写した。写本の多くはこれである。

また、親本を写した後それと違いがないかを改めること、他の伝本を入手しそれとの差異を改めることを「校合」と呼ぶ。転写本を制作時代で区分すると、室町時代以前は「古写本」、江戸時代以後は「近写本」、明治時代以後は「新写本」と呼ぶことがある。

最後に、奥書・識語について述べる。奥書・識語は本文の末尾に記されるのが通例で、年紀や署名を伴うものが多く、どのような素性の本を、どのような理由で、いつ、誰が書写したか、書写年

代と書写者及び伝写の系統や伝来の過程を知る重要な手がかりとなる。なお、奥書と識語の使い分けは曖昧で、未だ定説を見ない。奥書は、「本奥書」と「書写奥書」に区別され、本奥書は、親本にあった奥書をそのまま転記したもので、「本云」、「本奥云」という注記や署名の後に「判」、「在判」とあれば本奥書と判断できる。一方、書写奥書は、書写者が書写した際に記した奥書である（親本にある書写奥書は本奥書となる）。しかし、書写者自身が書写奥書を記さなかったり、奥書が架空のものであったり、奥書・識語が書写者や書写年代を記していないことも多くあるため、書誌作成上、注意が肝要である。

### 3. 書誌作成時の課題

書写資料の調査事例を紹介する前に、NII コーディングマニュアル（和漢古書に関する抜粋集）と日本目録規則（NCR1987R3、NCR2018）により、責任表示（タイトル・編著者）と書写事項（出版頒布に関する事項）の記述方針を確認する。細部を除き、両者の方針は共通しており、まとめると以下のようになる。

- ・タイトルと編著者は、情報源からの転記が原則だが、調査の上で補記することができる。
- ・資料にタイトルの記載がなく、調査により判明しない場合は目録担当者がタイトルを付す。
- ・書写地と書写者の記載があれば転記し、不明の場合は[書写地(書写者)不明]と補記する。
- ・書写者が明らかな場合、転写であれば[写]を付し、自筆であれば[自筆]と補記する。判断できない場合は、書写者の名前のみを記載する。
- ・書写年の記載があれば漢数字をアラビア数字に置き換え、和暦に西暦を補記する。

書写資料の場合は、タイトルや編著者、書写年の記載がないことも多いため、目録担当者の判断に委ねられる部分が多い。そのため、まったく調査を行わずに目録を作成すれば、[不明]ばかりの書誌になってしまう。また、多様な奥書をどう判

別するかについての注意点がないことも問題である。未調査のままでは、本奥書の年時を書写年として採用してしまう可能性もあるだろう。

一方、研究者は書写資料の書誌作成に関して、どのような注意点をあげているだろうか。今回は落合博志・海野圭介・堀川貴司・川瀬一馬氏らの論稿を確認したが、各研究者の見解はおおむね共通している。書写年代と制作の事情、伝写の系統が重要とし、本奥書と書写奥書の判別や、奥書の内容の信憑性や真偽の判断が不可欠だとする。また、書写奥書のない写本の場合は、蔵書印や紙質等さまざまな点を総合的に判断することの必要性を説いている。

書写資料の書誌を作成するためには、一つの情報によって総てを判断するのではなく、資料全体を調査することが必要だということがわかった。

### 4. 事例①『装束抄』

ここからは、実際に行った調査の過程と書誌の作成事例を紹介する。まずは「装束抄」(中央大学所蔵、以下「中大本」とする)を取り上げる。外題には「装束鈔 完」(左肩打付墨書)、巻首には「装束鈔後照念院殿令注置給也」と記載があるが、著者名や奥書はなく、書写者・書写年の情報は記されていない。書誌作成にあたり、書名を外題のまま「装束鈔」とするか、著者は誰かという課題が生じ、下記の通り調査を行った。

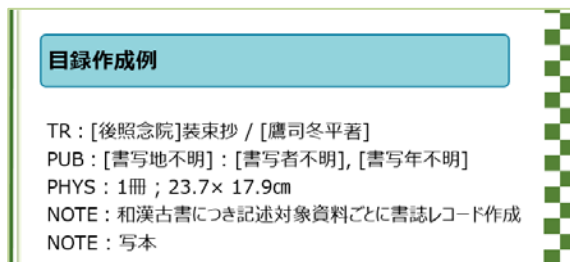
まず、『国書総目録』にて「装束抄」を引くと、同一の書名が複数件掲載されており、中大本がどれに該当するか判断できなかった。そのため、巻首の「後照念院」を日本古典籍総合目録データベース（以下「古典籍DB」とする）にて検索したところ、「後照念院装束抄」という書名がヒットした。古典籍DBにて宮内庁書陵部所蔵の「後照念院撰政冬平公記／装束抄」（以下「宮内庁本」とする）の画像が公開されていたため、中大本と比較したところ、宮内庁本とはほぼ同内容だった。

タイトルが「後照念院装束抄」に特定できた結

果、著者も古典籍 DB にて<sup>たかつかさふゆひら</sup>「鷹司冬平」だとわかった。なお、その典拠とされる『国書人名辞典』によると、「後照念院」は鷹司冬平のことである。

さらに、古典籍 DB の「国書所在」の項目から、「後照念院装束抄」が『群書類従』に収録されていることが判明したため、『群書類従』の本文と中大本を比較したが、『群書類従』には巻首の一文（「装束抄後照念院殿令注置給也」）がなかった。中大本が『群書類従』を写した可能性は低いいため、『群書類従』の刊行年から中大本の書写年を判断することはできない。書写事項を資料自体から読み取することは難しく今回は不明としたが、書写年は紙質等から江戸後期後半あたりと推定できる。

ここまでの調査結果をもとに作成した「装束抄」の目録を下記に示す。



## 5. 事例②『烏帽子考』

次に、中大本の「烏帽子考」を取り上げる。この資料は「烏帽子考」<sup>えぼしこう</sup>「平禮考」<sup>ひれこう</sup>「見聞諸家紋」<sup>けんもんしよかもん</sup>の合写本である。著者の記載はないが、『国書総目録』によって「烏帽子考」「平禮考」の著者は伊勢貞丈、「見聞諸家紋」の著者は未詳だと判明した。なお、『国書人名辞典』によると伊勢貞丈(1717~1784)は故実家であったことがわかる。

合写本の場合、記載がないだけで何らかの叢書の一部であることも多い。中大本に親著作はあるだろうか。古典籍 DB にて「烏帽子考」を調べていくと、「親著作」に『神風叢書』、「国書所在」に『安斎叢書』という書名が確認できる。「安斎叢書」は伊勢貞丈の著作や伊勢家伝来の冊子をまとめた叢書で、「神風叢書」はその別書名にあたる。内閣文庫には『安斎叢書』2点と『神風叢書』1点の所蔵

がある。『内閣文庫国書分類目録』にて、3点の叢書の収録タイトルを確認した結果、いずれの叢書も中大本の3タイトルを収録することがわかった（収録巻数は写本ごとに異なる）。つまり、中大本は、『神風叢書』もしくは『安斎叢書』の系統の資料を書写した可能性が高いが、中大本には「烏帽子考」の巻首に「二十四」という墨書きがある。この数字は、『神風叢書』が中大本の3点を収録する巻数と一致する。そのため、中大本と内閣文庫所蔵の『神風叢書』（以下「内閣文庫本」とする）を著作ごとに比較していくことにした。

### (1) 烏帽子考

「烏帽子考」には、中大本と内閣文庫本のいずれにも頭注があるが、中大本の頭注には不自然な空白箇所が見られる。内閣文庫本の頭注と比較すると、空白箇所は脱字であることがわかる(図1)。中大本が脱字を空白としている理由としては、親本に従っただけ、親本の虫食いや破れ箇所を判読できなかった等が考えられる。いずれにしても、中大本が内閣文庫本を直接写したとすれば、このような脱字は生じないだろう。

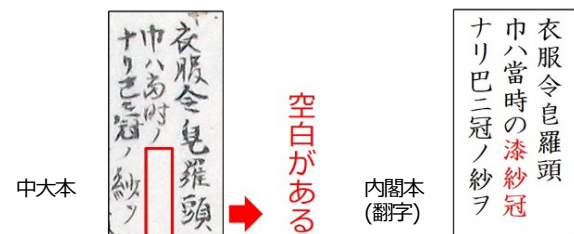


図1 「烏帽子考」の頭注の一部

### (2) 平禮考

「平禮考」には、内閣文庫本にのみ寛政10年(1798)の奥書がある。中大本が内閣文庫本を写したものであれば、中大本にもこの奥書がある方が自然である。あえて奥書を写さなかった可能性は低い。寛政10年の奥書は、中大本の親本にはなかったと推測される。

### (3) 見聞諸家紋

「見聞諸家紋」には注目すべき箇所が3点あった。1点目は、図2の四角で囲ってある横棒や馬の下の文字が中大本のみにあり、内閣文庫本に見

られないことである。これも中大本の親本が内閣文庫本ではないと考えられる例の一つである。

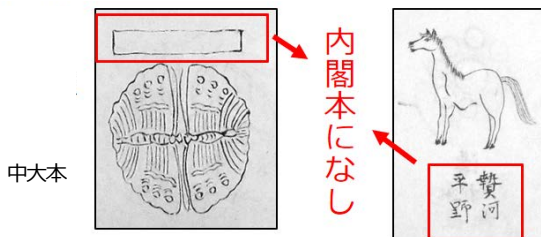


図2「見聞諸家紋」の一部（中大本）

2点目は、中大本に青色の墨書きが見られることである。例えば、中大本の本文では「將軍」の「將」の右側の「旁」の部分が青い墨で書かれている。内閣文庫本の対応する箇所を見ると、左側の偏の部分しか書かれていない。中大本の青色の墨書きは、書写した後に他本と校合した結果、書き入れられた可能性がある。青色の墨書きを除いた場合、中大本と内閣文庫本は「將」の字の左側しか書かれていない点が共通する。内閣文庫本は中大本の親本ではないが、本文としては近い関係にあると考えられる。

3点目は、中大本・内閣文庫本ともに「天明八戊申十月十八日写之 刑部源左檀子」という奥書が見られる点である。天明8年(1788)に「刑部源左檀子」が書写したという内容だが、中大本と内閣文庫本が同時に、同じ書写者によって写されたとは考え難いため、片方が書写奥書か、両方とも本奥書ということになる。先述の通り、内閣文庫本の「平禮考」には寛政10年(1798)の奥書があるため、天明8年が全体の書写年とはなり得ない。「烏帽子考」頭注の空白箇所の例を踏まえると、内閣文庫本より中大本の方が書写年が古いとは言えないだろう。よって、天明8年の奥書は中大本・内閣文庫本ともに本奥書と考えるのが妥当である。

なお天明8年の奥書は、秋田四郎「見聞諸家紋」群の系譜によると、『安斎叢書』の系統に見られる特徴とされる。中大本の親本が内閣文庫本でないことは確認したが、中大本が『安斎叢書』系統の本を書写した可能性は高いだろう。

内閣文庫本との比較の結果、中大本の書写年が

天明8年でないという結論が出たため、中大本の書写年を改めて考える必要が出てきた。そこで、蔵書印や旧蔵者から中大本の書写年を検討することにした。

中大本には「大江秀貞」という蔵書印が押されているが、この人物の生没年は工具書類にて確認できなかった。そのため、中大本が御橋惠言の旧蔵書である点に注目し、中央大学が所蔵する同旧蔵書の中に、伊勢貞丈の著作がないかを調査した。結果、『安斎叢書』に収録されている「軍神問答」と「諸説問答」の合写本が見つかった。同書を調べたところ、「軍神問答」には嘉永3年(1850)の奥書(年時のみ)があり、「諸説問答」には文化10年(1813)の「大屋氏大江秀貞」の奥書があった。この「大江秀貞」は中大本の蔵書印の持主と同一人物と考えられる。「軍神問答」と「諸説問答」の合写本は、ともに大江秀貞が書写した可能性が高いため、大江秀貞は主に江戸後期の人物だと考えられる。中大本の書写年は大江秀貞の没年よりも前となるため、書写年も江戸後期と推定された。

ここまでの調査結果を踏まえた目録作成例を下記に示す。

目録作成例
TR: 烏帽子考 / [伊勢貞丈著]・平禮考 / 伊勢平藏貞丈 [著]・見聞諸家紋   エボシコウ、ヒレコウ、ケンモン ショカモン
PHYS: 1冊 ; 27.4×19.0cm
PUB: [書写地不明] : [書写者不明], [江戸後期]
NOTE: 和漢古書につき記述対象資料ごとに書誌レコード作成
NOTE: 写本
NOTE: 「烏帽子考」「平禮考」「見聞諸家紋」の合写本
NOTE: 烏帽子考: 3丁、平禮考: 5丁、見聞諸家紋: 24丁
NOTE: 見聞諸家紋: 本奥書「天明八[1788]戊申十月十八日写之 刑部源左檀子」とあり
NOTE: 『安斎叢書』の一部を書写したものと推定
NOTE: 印記「大江秀貞」
NOTE: 御橋惠言旧蔵書

## 6. 事例③『射法弓禮書』

最後に、中央大学・日本体育大学が所蔵する弓道に関する写本、「射法弓禮書」(以下「中大本」「日体大本」とする。中大本の発見は会員校の蔵書本から)を取り上げる。いずれも奥書がなく、資料から書写者、書写年代の情報が得られず、工

具書やデータベース類からも該当の資料を探すことはできなかった。そこで、中大本、日体大本を比較検討することにした。特に、書写者や書写年代を推定できるか、巻首の「射法弓禮書第二」の「第二」を巻数と捉えてよいかの2点を課題として比較することにした。

比較の結果、書かれている内容は、行数に違いがあるものの差はなかった。筆跡や紙質は、中大本は行書体に近く、繊維は太い、日体大本は楷書体に近く、繊維は細い。書写された時代は違うようだ。日体大本に蔵書印があったため、日体大で所蔵する同じ蔵書印がある資料を調査したが、奥書や筆跡から書写者や書写年代を推定することはできなかった。巻数については、日体大本に「射法弓禮書一」があったが、「第二」を巻数と捉えるにはさらに調査が必要と判断した。

以上のことから、筆跡や紙質に基づき、やや強引かもしれないが、中大本を江戸後期前半、日体大本を江戸後期後半と推定した。目録作成例を以下に示す。

目録作成例	
<b>中大本</b>	TR: 射法弓禮書 PHYS: 1冊; 28.1× 18.6cm PUB: [書写地不明]: [書写者不明], [書写年不明] NOTE: 和漢古書につき記述対象資料ごとに書誌レコード作成 NOTE: 写本 NOTE: 巻頭に「射法弓禮書第二」とあり
<b>日体大本</b>	TR: 射法弓禮書 PHYS: 1冊; 26.4× 18.8cm VT: OH: 弓術指南秘巻 PUB: [書写地不明]: [書写者不明], [書写年不明] NOTE: 和漢古書につき記述対象資料ごとに書誌レコード作成 NOTE: 写本 NOTE: 書き外題の書名: 弓術指南秘巻 (題簽の右側に被る) NOTE: 左肩書き題簽「射法弓禮書 二」 NOTE: 巻頭に「射法弓禮書第二」とあり NOTE: 印記「源姓」「照武」

筆跡や紙質などに基づき、  
強引に「書写年」を推定する場合  
中大本 江戸後期前半  
日体大本 江戸後期後半

## 7. おわりに

以下、各事例の調査方針やその結果をまとめる。事例①の主なる課題は、書名や著者名であるが、工具書やデータベースを使うことによって、特定することができた。事例②の主なる課題を書写年の絞り込みとしたが、合写本の各タイトルを調査したり、本文や奥書、蔵書印を他本と比較したりすることで、少しは解決できた。事例③の課題は、

書写年の推定にあったが、資料からは推定が困難であった、更にはデータベースや工具書の類からも、手掛りを得られなかったが他本との比較・紙質を調べるなどによって推定せざるを得なかった。また新たな課題として、この資料は1巻本でよいかという疑問も出てきた。

上記の3例を踏まえ、書写資料の調査方法を簡条書きにまとめた。

- 工具書やデータベース、さらには関連論文を参照し、人名や書名を調査・確認する。
- 調査対象資料が所収されている叢書を調査する。
- 序、跋等、本文の中からヒントを探す。
- 他本を探し、奥書や識語を比較する。
- 他本と自館の本文を比較して書写年の前後関係を考える（他本に書写年が明記されている場合は特に有効）。
- 同一寄贈者の文庫内で関連する蔵書を探す（書写者等が判明する場合もある）。
- 蔵書印を調査し旧蔵者を特定する（旧蔵者の生没年から書写年を推定できる）。
- 表紙や紙質、装訂、筆跡等からヒントを探す。
- データベースのみに頼るのではなく、知人友人等と人を介し人との繋がりの中で、資料の照会をする。

書写資料の書誌作成においては、あらゆる方向から調査・検証することが必要であるが、上記の記載は調査を進める上での目安となるのではないだろうか。また上記以外の手段として、調査対象資料を専門とする教員が学内にいる場合、その教員に質問するという方法もあるだろう。

後日、報告大会の参加者から、「研究内容や結果が業務にどう影響したか、活用できたか教えてほしい」との質問があったため、本稿にて回答する。会員からは、簡略な書誌を充実した書誌へと修正できるようになった、基本的な調査の進め方が身についた、以前よりも展示資料の解説の情報量を増やすことができた等の意見があった。目録業務

に限らず、今回の研究成果は図書館業務のあらゆる場面で活かされている。

更に今回の研究発表を通じて、冊子体の工具書や蔵書目録の蒐集、加えて未整理のままに放置されている資料・仮目録は作成されているが公開されていない書物がデータベースに著録されている資料より多くある点を考えれば、人との繋がりを基にした資料の照会の必要性等、データベースだけを頼りにするのではなく、これらの点にも日ごろ努力すべきと強く感じた。

## ■参考文献

- 「国文学研究資料館和古書目録古典籍DBの作成」増井ゆう子・喜多妙子（平成27年度日本古典籍講習会、2016年1月）
- 「見聞諸家紋」群の系譜」秋田四郎（『弘前大学 國史研究』99、1995年）
- 「写本について「写本の書誌における諸問題」」落合博志（平成27年度日本古典籍講習会、2016年1月）
- 「写本について一奥書・識語を中心に」小山順子（第14回日本古典籍講習会、2017年1月）
- 「写本について一奥書・識語を中心に」海野圭介（第16回日本古典籍講習会、2019年1月）
- 『くずし字辞典』東京手紙の会編（思文閣出版、2000年）
- 『くずし字用例辞典〔机上版 新装〕』児玉幸多編（東京堂出版、1993年）
- 『国書人名辞典』1-5、市古貞次〔ほか〕編（岩波書店、1993-1999年）
- 『国書総目録〔補訂版〕』1-8 著者別索引（岩波書店、1989-1991年）
- 『国書読み方辞典』植月博編（おうふう、1996年）
- 『古典籍古文書料紙事典：必携』宍倉佐敏編著（八木書店、2011年）
- 『書誌学入門』川瀬一馬（雄松堂出版、2001年）

- 『書誌学入門：古典籍を見る・知る・読む』堀川貴司（勉誠出版、2010年）
- 『新版日本の紙：全国手漉き和紙見本帳』全国手すき和紙連合会（全国手すき和紙連合会、2006年）
- 『新編蔵書印譜〔増訂〕』上中下、渡辺守邦・後藤憲二編（青裳堂書店、2013-2014年）
- 『日本古典籍書誌学辞典』井上宗雄〔ほか〕編著（岩波書店、1999年）
- 『日本書誌学用語辞典』川瀬一馬（雄松堂、1982年）
- 『日本目録規則 1987版改訂3版』日本図書館協会目録委員会編（日本図書館協会、2006年）
- 『日本目録規則 2018年版』日本図書館協会目録委員会編（日本図書館協会、2019年）
- 『内閣文庫国書分類目録』上下 索引（内閣文庫、1961-1962年）

国立公文書館デジタルアーカイブ

〈<https://www.digital.archives.go.jp/>〉

ジャパンナレッジ

〈<https://japanknowledge.com/library/>〉

新日本古典籍総合目録データベース

〈<https://kotenseki.nijl.ac.jp/>〉

蔵書印古典籍データベース

〈[http://base1.nijl.ac.jp/~collectors\\_seal/](http://base1.nijl.ac.jp/~collectors_seal/)〉

電子くずし字字典（東京大学史料編纂所）

〈<https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>〉

日本古典籍総合目録古典籍データベース

〈<http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/>〉

目録システムコーディングマニュアル

〈<http://catdoc.nii.ac.jp/MAN2/CM/mokuji.html>〉

### 〈時代区分〉

江戸初期	慶長～寛永（1643 まで）
江戸前期	正保～元禄（1703 まで）
江戸中期	宝永～天明（1788 まで）
江戸後期	寛正～天保（1843 まで）
江戸末期（幕末）	弘化～慶応（1868 まで）

\*堀川貴司『書誌学入門：古典籍を見る・知る・読む』（勉誠出版、2010年）、9頁参照。

### 〈参考文献〉

「国文学研究資料館和古書目録データベースの作成」増井ゆう子・喜多妙子（平成27年度日本古典籍講習会、2016年1月）

「『見聞諸家紋』群の系譜」秋田四郎（『弘前大学國史研究』99、1995年）

「写本について「写本の書誌における諸問題」」落合博志（平成27年度日本古典籍講習会、2016年1月）

「写本について―奥書・識語を中心に―」小山順子（第14回日本古典籍講習会、2017年1月）

「写本について―奥書・識語を中心に―」海野圭介（第16回日本古典籍講習会、2019年1月）

『くずし字辞典』東京手紙の会編（思文閣出版、2000年）

『くずし字用例辞典〔机上版 新装〕』児玉幸多編（東京堂出版、1993年）

『国書人名辞典』1-5、市古貞次〔ほか〕編（岩波書店、1993-1999年）

『国書総目録〔補訂版〕』1-8 著者別索引、（岩波書店、1989-1991年）

『国書読み方辞典』植月博編（おうふう、1996年）

『書誌学入門』川瀬一馬（雄松堂出版、2001年）

『書誌学入門：古典籍を見る・知る・読む』堀川貴司（勉誠出版、2010年）

『新編蔵書印譜〔贈訂〕』上中下、渡辺守邦・後藤憲二編（青裳堂書店、2013-2014年）

『日本古典籍書誌学辞典』井上宗雄〔ほか〕編著（岩波書店、1999年）

『日本書誌学用語辞典』川瀬一馬（雄松堂、1982）

『日本目録規則 1987版改訂3版』日本図書館協会目録委員会編（日本図書館協会 2006年）

『日本目録規則 2018年版』日本図書館協会目録委員会編（日本図書館協会 2019年）

『内閣文庫国書分類目録』上下 索引、（内閣文庫、1961-1962年）

国立公文書館デジタルアーカイブ <<https://www.digital.archives.go.jp/>>

ジャパンナレッジ <<https://japanknowledge.com/library/>>

新日本古典籍総合データベース <<https://kotenseki.nijl.ac.jp/>>

蔵書印データベース <[http://base1.nijl.ac.jp/~collectors\\_seal/](http://base1.nijl.ac.jp/~collectors_seal/)>

電子くずし字字典（東京大学史料編纂所）<<https://www.wap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller/>>

日本古典籍総合目録データベース <<http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/>>

目録システムコーディングマニュアル <<http://catdoc.nii.ac.jp/MAN2/CM/mokuji.html>>

No.	用語・語句	川瀬一馬『日本書誌学用語辞典』雄松堂, 1982	『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店, 1999
1	古典籍	古書の中でも、やや内容形式ともに尊重の意を含む語義がある。	〈総説〉古い書物の中で、特に内容・形態ともに優れているものをいう。
2	法華義疏 (ほっけぎしょ)	-	〈経典〉聖徳太子の著になる「三経義疏」のうち、太子自筆の『法華義疏』(四巻、宮内庁三の丸尚蔵館蔵)をいう。内容は『法華経』の注釈書。わが国最古の肉筆遺品としてその価値はすこぶる高い。
3	写経	版経(はんぎょう)の対。仏教を書写すること。また、書写した仏経。仏教では写経は功德は大であると説き、その流伝のためにこれを奨励した。	〈経典〉経文を書き写す行為、また、写された経典そのものを写経と呼ぶ。奈良時代に入ると一大仏教国が奈良に形成され、必然的に大量の経典書写が要求された。
4	一切経 (いっさいきょう)	仏典すべてを集録したものをいう。	〈経典〉漢訳仏典を集大成したものを用いる。天武天皇二年(673)七月、飛鳥川原寺における「一切経」書写を端緒として、平安時代に入ってから信仰を数量で表す証として「一切経」書写供養が頻りに営まれた。
5	金剛場陀羅尼経 (こんごうじょうだらにきょう)	-	〈経典〉願文に見える「丙戌年」が天武天皇十五年(686)と考えられ、現存するわが国最古の写経である。一切衆生の往生浄土を願って結縁書写供養をしたもの。
6	連綿体 (れんめんたい)	-	〈文字〉続け書きともいい、二文字以上を続けて書くことで、平仮名や行草書に用い、特に平安時代に完成した仮名はこの連綿を意識して用いた。
7	古写本 (こしゃほん)	新古は比較的の称呼であるが、上限は聖徳太子以来、室町末期までの写本を古写本とし、それに続く慶長・元和・寛永年間の写本は古写本に準じて扱う。	〈書写〉書写年代の古い写本。かなり曖昧に使用され、だいたい江戸時代中期ごろまでのものについていう。この語は新写本に対して用いられたものであり、明確な基準がない。
8	近写本 (きんしゃほん)	近い頃、新しく書写した本。近鈔(抄)本。	〈書写〉新写本よりもやや古い、近時に書写された本。古写本に対して用いられる語。ただし、この呼称はあまり多く使われない。
9	新写本 (しんしゃほん)	新鈔本。新しく書写した本。	〈書写〉近年に新しく書写した本。古写本に対して用いられる語。主に明治初年以後の写本をいう。
10	自筆本 (じひつぽん)	他筆本の対。写本の筆者を尊重して称する語で、自著の筆写とは限らない。	〈書写〉著者または編者が自分自身で書写した本のこと。編著者の真筆であるので、その資料性は極めて高い。
11	転写本 (てんしゃほん)	写本をもとにして書写した本。重写本。	〈書写〉写本を親本としてさらに書写した本のこと。転写本には、原本より転写したものと、写しからさらに転写したものとがあるが、後者のみを転写本という見解もある。現存する古典作品は、転写から転写を重ねた写本であることが多く、伝本研究の基礎資料ともなっている。
12	透写 (とうしゃ)	「すきうつし」とも読む。うつりのよい紙を上からあてて、なぞること。	〈書写〉親本を忠実に模写する方法の一つで、親本の上に直接薄様の料紙を載せて透き写すこと。「影写」「影鈔」「透き写し」「敷き写し」などともいう。
13	薄様 (うすよう)	厚様の対。斐紙(雁皮紙)を薄く漉いたもの。	〈料紙〉薄く漉いた紙葉、薄様紙の略。薄い楮紙もふくむが、主として薄い雁皮紙を指す呼称。
14	楮紙 (ちよし /こうぞがみ)	「こうぞがみ」とも読む。桑科の楮(こうぞ)の繊維で製した紙。雁皮に比すれば製紙の材料としては劣るが、全国到る処に栽培せられ、豊富に資材が得られるため、江戸中期に三椏(みつまた)が製紙に用いられるまで、製紙の主材となっていた。なお、平安期以後江戸初期まで、斐と楮とを交ぜて漉いた紙が多く、製紙の場合は、二種の材料を交ぜて漉くと、両者の長所が互に発揮されて良質の料紙が得られるという。	〈料紙〉楮(こうぞ)の樹皮の韌皮(じんぴ)繊維を原料として漉いた紙の総称で、「こうぞがみ」ともいう。麻を原料とする麻紙(まし)は、奈良時代には相当多かったが、平安末期には衰退し、以後近代までの和紙は、コウゾ皮を主要原料としてつくられている。
15	親本 (おやほん)	伝流の基になった本。祖本。	〈性質〉写本における書写活動、版本における印刷活動、あるいは複製本の作成にあたって、全面的に依拠した本。
16	謄写 (とうしゃ)	-	〈書写〉謄書ともいい、文書を書き写すこと。その書き写した本を謄写本、謄本ともいい写本と同義。
17	校合 (きょうごう)	校正と同じ。他の書物の本文と較べ合わせて、何れがより正しい本文であるかを考究しようとする事。	〈校訂〉本文の異同を比較して、誤脱を正し、原本の本姿に返そうとすることで、他の書物の本文と較べ合わせて、何がより正しい本文であるかを考究することを最終目的とする。
18	稿本 (こうほん)	原稿本。草本。「原稿本」を見よ。 「原稿本」：稿本。草本。著者(又は編者)の草稿。編著者が自ら執筆したもの他、門弟又は後人が転写したものなどもある。 又、印刷に附する基の本文をいう。	〈性質〉下書き、草稿のこと。また、印刷するときのもとなる本のこと。原稿本、草本などともいう。稿本には編著者自身の手になるもののほかに門人など別人がまとめたり、後人が転写したものなどがあり、特に編著者自身が筆写したものを自筆稿本と呼ぶ。作品研究において、稿本のもつ資料的な価値は高いが、特に古典で初稿本が現存する例は少ない。
19	初稿本	-	〈性質〉最初に作られた稿本。草稿本が編著者の手になる下書き・草案の本のことをさし、中書き本、清書本に対する語として用いられるのに対して、初稿本・再稿本・三稿本などの称は、それぞれ改稿された段階・順序を示す語として用いられる。



No.	用語・語句	川瀬一馬『日本書誌学用語辞典』雄松堂, 1982	『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店, 1999
20-1	中書本 (ちゅうしょぼん) 中書き本 (なかがきぼん)	「中書本」シナの用語。中書清本も同じ。中清書本。	「中書き本」〈書写〉草稿本と清書本との間に位置するもので、草稿本を整理したものをいう。
20-2	中清書本 (ちゅうぜいしょぼん)	中書本・中書清本(シナの用語)。草稿から一旦清書した本。	〈書写〉初稿本から定稿本に至るどの段階であっても、最終的な清書本を作成する以前に、草稿をいったん整理し、中間的に清書した本のことをいう。
21	清書本 (せいしょぼん)	浄書本。清本(シナの用語)。本文を清書した本。稿本について言うが、どの段階の稿本でも一応整頓して書写されている本を称する。	〈書写〉「清書」は「きよがき」ともいい、草稿を丁寧に書き直すこと、その書き直した本を清書本という。浄書本も同義。改稿されるとき、いずれの段階のものでも清書した本は清書本であるが、特に定稿本を清書本とよぶことがある。
22	定稿本 (ていこうぼん)	書き改めて内容が定まった稿本。完稿本。	〈性質〉書き改められて内容が完成決定した稿本をいう。
23	奥書 (おくがき)	書物の最末の後に書き記した文。その書きしるした内容に拠って、それを種々区別して言う。奥書はその総称である。	〈奥書等〉書物の最後、または本文の末に記された文章。奥書には本奥書・書写奥書・校合奥書(校合を加えた旨を記す奥書)・加証奥書(証本や相伝本であること、また講説を行ってそれを確かに弟子が聞いたことなどを証明した奥書)・相伝奥書(師が弟子に書物を与えた時に記した奥書)・勘注奥書(その書物に注を付したり考証したりした時の奥書)などがある。
24	識語 (しきご)	書物に書き加えた文字・文章をいう。見返し・巻末などの余白に記す場合が多いが、巻中どこに加えてもいう。	〈奥書等〉ある書籍についてさまざまな情報を、その書籍に書き加えた文字・文章をいう。奥書と区別がつきにくい場合もあり、専門家の間でもいまだに定説をみないが、記載者がその書籍の著者や書写者ではなく、所蔵者や読者など後人であるときに識語といい、奥書と区別されている。
25	本奥書 (ほんおくがき /もとおくがき)	もとにした(所拠の)底本に存した奥書。これをその儘伝えて行けば永久に存続するものである。	〈奥書等〉「もとおくがき」ともいうが、「本の奥書に曰く」の意であるから、「ほんおくがき」がよいとされる。ある書物の底本とした本(親本や祖本)の奥書、またそれを写した奥書。
26	書写奥書	-	〈奥書等〉ある書物を写した時に、筆者がその書写の経緯を記した奥書。書写年月日、書写者の署名や花押(または印記)のある場合が多い。なお、書写奥書の写した奥書は本奥書である。
27	本云 (ほんにいう)	-	〈奥書等〉本奥書の頭(多くは右上)に付し、底本(親本や祖本)にあった奥書であることを示すことば(校合した別の一本にもこうあったということを示す場合にも用いられる)。
28	在判 (ありはん /ざいはん)	原本の筆者の署名が書き判(花押)になっていたのを、後に移写する場合に、もとは花押であったということを示す表記。即ち「在判」と表記してあれば、また写しである。	〈奥書等〉花押・書判(かきはん)が記載されていた事実を示す記号。写しなどを作る際に、正文書において自署されるべき箇所に「在判」「判」と書いて、書判・花押等が記載されていたことを表示する。
29	祐筆/右筆 (ゆうひつ)	身分の高貴な人に代わって筆を取るもの。武家方に特にその働きをする者が多く、将軍諸侯等、自筆状などは稀で、筆蹟がすぐれていても、殆ど皆右筆が書く。	〈書風〉もともとは単に筆を執って文字を書くことを意味した。やがて、貴人に仕える書き役、という武家の職名となる。
30	極め (きわめ)	極め書。極め札。江戸初期以前、古筆鑑定専門の家柄として古筆家が出した古物の筆跡鑑定書。もともと正確というものでもなく、然もこれを乱発したので、その書付は寄り所とし難い。	〈古筆〉書画や刀剣などの真贋ならびに作者や筆者の鑑定をすること、またそれを記した鑑定書をいう。
31	古筆家 (こひつけ)	-	〈古筆〉古筆鑑定を専門とする家で、江戸初期の元和末年(1624)に創立された。古筆見。
32	頭注 (とうちゅう)	本文の上欄に加えてある注。	〈評点等〉「首書」「頭書」ともいう。古典の版本の上欄に置いた注釈。版本によって行われた形式であるが、元禄頃には『伊勢物語』の写本にも応用されている。